

4 『医学自然学報』と『コペンハーゲンの医学・哲学紀要』の比較

安西なつめ

大阪大学大学院人文学研究科

Miscellanea curiosa, sive ephemeridum medico-physicarum Germanicarum academiae naturae curiosorum (『医学自然学報』) (1670-) は神聖ローマ帝国のシュバインフルトに創設された *Academia Naturae Curiosorum* から刊行された学術雑誌である。 *Acta medica et philosophica Hafniensia* (『コペンハーゲンの医学・哲学紀要』) (1673-1680) はデンマークのコペンハーゲンでトマス・バルトリン (Thomas Bartholin, 1616-1680) によって刊行された学術雑誌である。ロイヤル・ソサエティの会員であったマルティン・リスター (Martin Lister, 1639-1712) から John Ray (1627-1705) 宛ての書簡 (1676年7月2日) に見られるように、17世紀において『医学自然学報』は *Germ. Transact.*, 『コペンハーゲンの医学・哲学紀要』は *Danish Transactions* として知られていた。どちらも初期近代における学術雑誌刊行の潮流の中で、医学および自然学に主眼を置いた最初期の雑誌として特筆すべき性格を有している。

17世紀後半における学術動向を明らかにするため、両雑誌を雑誌の特徴と報告者の傾向から比較した。比較に際し『コペンハーゲンの医学・哲学紀要』の刊行期間に合わせ、『医学自然学報』は1-10巻(1670-1680)を使用した。『医学自然学報』では医学に資する「動物」、「植物」、「鉱物」に関する報告が組織的に収集された。創刊初期には病理学関連の報告が多い。『コペンハーゲンの医学・哲学紀要』では解剖や症例、奇形など医学関連の論考が報告され、全体の60%以上を占める。しかしそのほか植物、地理、気候、コペンハーゲンの歴史に関する報告など収録論考の主題は多様である。報告者に関しては『医学自然学報』1-10巻に収録された1519題の *observatio* において Simon/Szymon Schultz (1622-1708), Georg Wolfgang Wedel (1645-1721), Georg Seger/Segerus (1629-1678), Carolus Raigerus/Raiger, Christopher Roesler の順に収録数が多かった。対して『コペンハーゲンの医学・哲学紀要』には595題が収録され、Ole Borch (1626-1690), トマス・バルトリン, Caspar Kölichen (1635-1687), Johann Ludwig Hannemann (1640-1724), Oligerus Jacobaeus/Holger Jakobsen (1650-1701) の順に収録数が多かった。またトマス・バルトリン, Ole Borch, Johann Ludwig Hannemann, Erasmus Bartholin, Georg Wolfgang Wedel, Johann Daniel Major の論考は両雑誌に掲載されていた。中でもトマス・バルトリンは『医学自然学報』に25題、『コペンハーゲンの医学・哲学紀要』に142題報告している。『医学自然学報』創刊号の第1題はバルトリンの論考であり、同時期における影響力の大きさが伺える。一方でバルトリンによる報告は『医学自然学報』の第1巻(1670)と第2巻(1671)のみに見られ、以降の報告は『コペンハーゲンの医学・哲学紀要』に見られる。

〈本研究はJSPS 科研費20K12908の助成を受けたものです。〉